

Reading Seminar: Spring 2024



第7回 伊藤亜聖『デジタル化する新興国：先進国を超えるか、監視社会の到来か』（中公新書、2020年）

リーディングセミナーでは、近年、大学界隈において話題の、高校生向けに書かれた（または高校生にも考えて欲しい）、新書や文庫を1冊、取り上げ、参加者で読書体験を共有します。

・前回の模様

今回は、伊藤亜聖『デジタル化する新興国：先進国を超えるか、監視社会の到来か』（中公新書、2020年）を取り上げます（[出版社の案内](#)）。スマートフォンを筆頭に、デジタル化が私たちの生活を変えています。その行く先はどこでしょうか。本書は新興国・発展途上国が最先端技術の「実験場」であることに着目して、その可能性と危険性を探っています。ぜひ、来るべき社会について考えてみましょう。

- ・図書は各自、書店や図書館で入手して下さい

日時

- ・2024年3月25日（月） 14:00-17:00

会場

- ・金沢大学 角間キャンパス
 - インキュベーション施設 A302（3階）
 - [Google Map](#)
- ・公共交通機関（via 北陸鉄道バス）
 - バス停（乗り口）
 - 金沢駅兼六園口（東口）8番乗り場
発 93・94・97金沢大学行き（兼
六園下経由）
 - バス停（下車）：**金沢大学自然研前**
 - インキュベーション施設まで徒歩5
分
 - 時刻表（北陸鉄道バス 公式サイト）
 - [金沢大学行き/金沢駅行き](#)

注意 | バス停から会場までのアクセス

- ・北陸鉄道バスを「金沢大学自然研前」で降り、連絡橋（南アカンサスインターフェース）を渡ってください
- ・連絡橋を渡ったあとは右手に進んでください。一番奥の建物が会場です
- ・インキュベーション施設の入り口はわかりにくく、プレートもかかっていません。新学術創成研究機構を目指してください（建物は連結しています）



南アカンサスインターフェース（入り口）



南アカンサスインターフェース



南アカンサスインターフェース（出口）ここを右手に進む

Note | キャンパスの雰囲気を味わってみよう

- ・南アカンサスインターフェース（出口）を左手に進むと、もう一つ、連絡橋が出てきます（北アカンサスインターフェイス）。橋を渡った先が、1年生の共通科目、人間社会学域のメインキャンパスです
- ・この時期の上記エリアは新入生があふれており、大学の雰囲気を味わえます。時間があれば、散策してみましょう
- ・大学の飲食店を利用できます。会場最寄りの食堂は[ナカフクリ食堂](#)です。北アカンサスインターフェイス手前にある「中福利施設」の階段を下りてください



新学術創成研究機構（右手）



新学術創成研究機構（正面玄関）

Note | その他

- ・服装の指定はありません

事前課題

- ・提出先：[Google Form](#)
 - 開催日前日（3月24日（日）23時59分）までに、課題に答えてください
 - 当日は、事前課題をもとに、参加者で議論し、紹介文を作成します

オンライン

- ・接続方法：Zoom
 - 13:30から入室可能です
 - 接続情報は、Google フォームに登録されたメールアドレスに、当日午前中にお送りします
 - メールが届かない場合は、下記の連絡先にお問い合わせください
 - 少人数のグループワークです。できるだけビデオオンでご参加下さい

配布資料

- ・オンラインストレージ：[Google ドライブ](#)
 - アクセス権が必要な場合は、適宜クリックするか、以下のメールアドレスにお問い合わせ下さい
- ・[ウェブページ](#)

Note | 研究者による著書紹介

- ・ウェブページに、時間の都合で紹介できなかった、著書紹介を追加しました
- ・特に正解があるとは思いません。今回作った紹介文との違いを楽しんでみましょう

アンケート（受講の感想など）

- ・提出先：[Google Form](#)
 - 翌日（3月26日（火）23時59分）までに回答下さい

連絡先

- ・担当講師（苅谷）：kariyach@staff.kanazawa-u.ac.jp
- ・入試課：076-264-6082

重要

- ・当日、体調不良などで急きょ、参加できなくなった場合は、簡単で結構ですので、上記のメールアドレスに連絡下さい

その他

- ・このプログラムは金沢大学KUGS高大接続プログラム（大学での学び）の対象です
- ・特別入試に興味がある方は[公式サイト](#)をご覧下さい

紹介文

『デジタル化する新興国』（経済学者・伊藤亜聖）は、何気なくスマートフォンを使っている高校生にこそ読んではいい本である。通常、デジタル化が論じられる際、その対象は先進国である。だが著者が目をつけるのは新興国であり、著者は、様々なデータや資料に基づいて、デジタル化によってもたらされる可能性、脆弱性のどちらにおいても新興国の方がより大きいことを示す。またデジタル化は、人工知能（AI）技術や通信システムなど、好意的紹介されることが多いため、デジタル化によって生活が便利になるような印象をもつ人が多いだろう。しかし著者はその危険性を論じることを忘れていない。

新興国は、いま、工業化とデジタル化という二つのフェーズにある。前者のフェーズにおいては、新興国は先進国で開発されたものを輸出すればよいが、後者のフェーズには広大な新興国自身が現場となって、新たなデジタル技術を用いたサービスの苗床になっている。ここに新興国の大きな利点がある。

この本を読んでいくと後半部分まで日本のことしか書かれていないどころか資料にも載っていない。次々と述べられる主張と日本の状況を結びつけるたび、「日本はデジタル社会においてあまり発展していないのではないか」と考えるようになる。“先進国日本”的国民として生きてきた人には衝撃的な内容なのではないだろうか。現在の国際情勢はめまぐるしく移り変わっていて、デジタル分野においては「先進国」と「それ以外」で分けられるほど単純なものではない。徐々に力をつけるデジタル新興国に、日本はどれだけ協調し、学びを得られるのだろうか。考えていくのは他の誰でもない私たちだ。また、日本は先進工業国と課題先進国という二つの立場から、新興国と途上国との架け橋のような役割をしていくべきであるだろう。

金沢大学News

- 後日掲載予定です